

## 金融論の研究や教育における保険への関心

名古屋大学大学院経済学研究科 家 森 信 善

### 1. はじめに

本報告は、保険論の隣接領域である金融論（および経済学）の分野で、「保険」がどのように教育され、研究されているかを明らかにすることを目的にしている。具体的には、次の3つの観点から議論を行うことにした。

第1に、金融論の「教育」において保険がどのように位置づけられているかである。そのため、過去50年ほどの間に出版された50冊の大学レベルの金融論の教科書から、保険に関する記述を抽出して分析するというスタイルをとった。

第2に、金融論の「研究」において保険のどのような側面が分析対象になっているかを調べることにした。これにより、金融学者が保険のどのような部分に関心を持っているかを明らかにできるであろうし、保険学者と金融学者の共同研究が発展することも期待できよう。そのため、1970年以降の日本金融学会の全国大会報告における「保険」関連の研究を抽出するという作業を行った。

第3に、アメリカでの保険研究について先行研究を紹介する。アメリカでの保険研究では、保険プロパーの領域の研究だけでなく、「経済学」や「ファイナンス」分野の研究の影響が大きい。そこで、世界での経済学や金融論の分野での保険がどのように研究されているかを知るために、アメリカでの保険研究の動向についてまとめたいくつかの先行研究の結果を紹介する。

### 2. 大学レベルでの金融論の教育における保険

調査方法としては、過去50年ほどの間に出版された大学レベルの金融論のテキスト50冊を対象にして、「保険」がどのように記述されているか（記述されていないという事実も含めて）を調べていくこととした。

1987年頃までに出版された金融論のテキストでは「保険」はほとんど触れられていないが、1990年前後に出版されたテキストで以前よりは長めの記述がみられるようになり、1995年以降になると「保険」にある程度の説明を与えている金融論のテキストが増えている。つまり、金融論のテキストの中で、保険関連の記述は時代とともに増えてきていることが

## 【平成 21 年度日本保険学会大会】

共通論題「保険概念の再検討」

報告要旨：家森信義

---

確認できた。これは、金融論の研究関心が、純粋な理論的な分野から金融制度に広がってきたことを反映しているのだろう。それに加えて、保険会社が金融市場で大きなウエイトを占めるようになったという現実や、保険会社の破綻が家計や経済に影響したというバブル崩壊後の苦い経験も反映しているのであろう。

### 3. 日本の金融論研究における保険への関心

次に、金融論の領域で保険のどのような側面が研究されているかを調べてみることにした。ここでは、日本金融学会の全国大会（年に2回、すなわち春季および秋季大会が開催されている）での報告タイトルに「保険」が入っているものをピックアップするという手法で研究を特定化することとした。

その結果を見ると、日本金融学会で初めて行われた「保険」関係の報告は1985年の小藤康夫先生の報告であった。1985年以降5年ずつに期間を区切ってみると、1980年代後半3件、1990年代前半4件、1990年代後半8件、2000年代前半11件であり、2005年から2009年春までは1件もない状況である。2005年以降の動向をどう評価するかは別にして、2000年前後の時期に保険関係の研究が活発に報告されていたことがわかる。ただし、報告者の顔ぶれを見ると、多数の金融学者が関心を持って、保険学会とは無関係に、「保険」を研究しているというよりは、「保険」を金融面から捉えることに関心のある保険研究者が日本金融学会でも報告しているというのが実態のようである。

### 4. 世界の保険研究の状況

アメリカの保険学者にとっても、「保険研究のコアの課題は何か」というのは未解明の問題であり、保険研究者に対して直接尋ねる方法や保険分野の主要な学術雑誌の掲載論文の動向を分析する方法などによって、保険研究のコアを調べる研究が行われている。たとえば、Weiss and Qiu(JRI 2008)は、Journal of Risk and Insurance の創刊以来の掲載論文をトピックス別に整理し、保険数理や損害保険、雇用者給付といった保険領域の固有テーマとともに、保険経済学やファイナンス/リスクマネジメントといった経済学や金融論との境界領域の研究も大きなウエイトを持っていることを明らかにしている。その他の研究でも同様の結果が得られており、アメリカを中心にした世界の保険研究は経済学などの隣接分野の影響を強く受けて、それらの成果を生かしながら発展していることが確認できた。